

ひあがった東川（東川）

ふしぎな話

むかし、ある暑い夏のこと、雨がなん日も降らず、まい日、お日さまがキラキラと照りつけちよった。徳山では、どの川も、水が少のうなり、ひあがったりしちよった。ちよどそのころ、ある旅の坊さんが、東川のほとりをとおりかかった。

坊さんは、立ちどまって、汗をふいた。「ああ、のどがからからにかわいたなあ」



ひとりごとをいながら、ふと、東川を見ると、ひとりの女が川をせきとめて、洗たくをしちよった。せきとめたところには、すんだ水が、ちよろちよろ、流れ込んじよった。

坊さんは、女に声をかけた。

「そこのお女中、のどがかわいて困っておられます。その川の水を一ぱい飲ませてくださらんか」

「それはお安いことですが、わしやあ、いま洗たくものをゆすいじよりますけえ。見てのとおり、水が少のうて、たった一ぱいの水でも、いまは飲ませてあげるわ

けにはいかんのです」

女は、つつけんどんにことわった。

旅の坊さんは、また汗をふいた。

「そうですか」

坊さんは、口の中で、念仏をとなえてから、ゆっくりと立ち去った。

女は、いつとき、洗たくの手を休めて、坊さんの後ろ姿に向かつていうた。

「へん、こねえに水が少ないときに、見知らぬ旅の者に飲ませる水があるうかい」

ペロツと舌を出して、洗たくもののすずぎを続けようとして、びっくりした。

「ありやりや、こりやあ、どうしたことか」

いままであつた水は、すつかりのうなつちよった。

その日から、東川の水はひあがってしもうたげな。

「ありやあ、きつと弘法大師さまじやったんじやろうのう。わしやあ、もうしわけないことをしもうた。たった一ぱいの水じやったののう」

139

ふしぎな話

女は、後悔したけど、つぎの年も、そのつぎの年も、東川には、水は流れなんだぞうな。

140

それで、人びとは、東川のことを、水無川ともいうようになったげな。

（語り手 徳山市権現町二二七 熊野神社 神本正律さん）